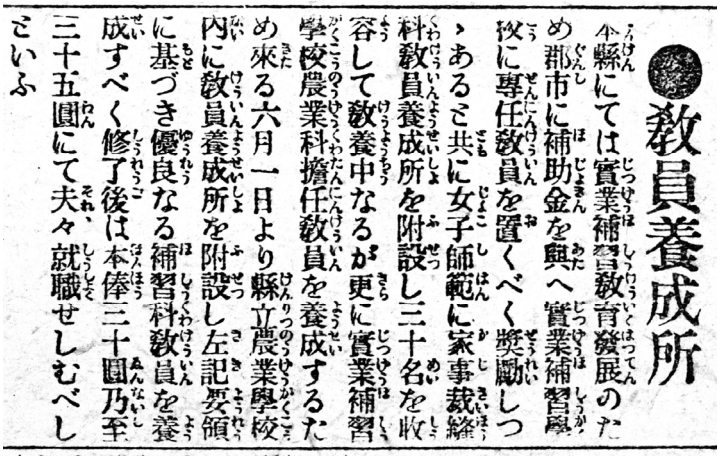
青年師範学校 実業教育教員養成の道

実業補習学校の成立と教員養成

明治時代、日清・日露戦争を契機として国の産業経済が急速に発展し、これに従事する者の教育が急がれるようになった。このため政府は、明治26（1893）年、「実業補習学校規程」を公布し、勤労青少年に実業教育と普通教育の補修を行う実業補習学校を設置することとした。この当時は、実業補習学校が小学校に併設されていたため、教員は兼務の状態が大半であった。

実業補習学校が普及する中、農業教員養成の必要性が高まり、大正4（1915）年3月、小学校農業科および実業補習学校の農業科専任教員を養成する目的で、山口県山口師範学校に農業教員養成所が付設されることとなった。これが後の青年師範学校へとつながっていく。


教員養成所

本縣にては實業補習教育發展のため郡市に補助金を與へ實業補習學校に專任教員を置くべく奬勵しつゝあると共に女子師範に家事裁縫科教員養成所を附設し三十名を收容して教養中なるが更に實業補習學校農業科擔任教員を養成するため來る六月一日より縣立農業學校内に教員養成所を附設し左記要領に基づき優良なる補習科教員を養成すべく修了後は本俸三十圓乃至三十五圓にて夫々就職せしむべしといふ

教員養成所の付設を伝える新聞記事

（「防長新聞」大正9年4月27日）

この農業教員養成所は希望者が少なかったため、県立農業学校に移管されることとなり、大正9年6月、山口県農業教員養成所が県立農業学校に付設された。なお、同年には室積の山口県女子師範学校に山口県家事裁縫科教員養成所が付設された。

大正9年の「実業学校令」の改正により、実業補習学校の性格をより明確にするための教員養成が必要となり、「実業補習学校教員養成所令」が公布された。これを受けて、翌年、県では山口県立女子実業補習学校教員養成所（山口県女子師範学校内）、山口県立実業補習学校農業科教員養成所（県立農業学校内）を設け、専任教員の本格的な養成に着手した。こうした県の努力もあって実業補習学校の教員は学校数の増加にともなって充実していった。

実業補習学校農業科教員養成所の門

青年学校の発足

第一次世界大戦後、国力の増進を目的として青年教育の振興が図られていた。大正14（1925）年には、中学校以上の学校に現役の軍人を配属して軍事教練を行うと同時に、勤労青年に対して軍事教育を施すために青年訓練所を設置した。

この青年訓練所と実業補習学校は施設や教員、対象者が重複する場合が多かったため、昭和10（1935）年4月に公布された「青年学校令」によって、青年学校として統合された。青年学校は、勤労青年を対象とする中等教育程度の定時制の学校で、昭和14年には義務制（男子のみ）となり、昭和22年まで存続した。

青年学校教員養成所から青年師範学校へ

青年学校の発足にともない、昭和10年、県は山口県立実業補習学校農業科教員養成所を山口県立青年学校教員養成所と改め、専任教員の育成を図った。同時に、山口県立女子実業補習学校教員養成所も山口県立女子青年学校教員養成所と改称した。

この当時はまだ、それぞれ小郡農業学校、女子師範学校に併設という状態であったが、次第に養成所の独立が問題となっていった。

昭和16年4月、県は養成所の独立を決め、先に女子青年学校教員養成所が移転していた防府の三田尻村（現在の桑山）に、青年学校教員養成所を移転させると同時に、女子の養成所を併合し女子部とした。

昭和19年2月、「師範教育令」の改正にともない青年学校教員養成所は師範学校と同様に官立移管され、山口青年師範学校となった。修業年限3年の専門学校程度の学校に昇格したことで、青年教育の飛躍が期待されたが、教育内容の面ではむしろ後退しながら終戦を迎えることとなった。

青年學校 教員養成所獨立
防府市に移轉！
生徒も五十名に增員

防府移転を伝える新聞記事
（「防長新聞」昭和16年4月2日）

山口県立青年学校教員養成所